

大分県立先哲史料館における教育普及活動

安田 晃子

はじめに

県立先哲史料館は平成七（一九九五）年二月、複合文化施設である「豊の国情報ライブラリー」内の施設として、県立図書館・県公文書館と共に設置された。本年度五周年を迎える。先哲史料館は、主な施設として、一階に展示室、三階に閲覧室・研究室、四階に収蔵庫を有している。

先哲史料館はその設置の経緯から、博物館的側面と文書館的側面の二面をもつ施設である。第一の博物館的機能としては、『大分県先哲叢書』の編集をはじめとする大分県出身の先哲の調査研究を行う人物資料館としての博物館的機能である。もう一つは大分県に係わる記録史料の収集・保管・調査研究を行う文書館としての機能である。

地域史を研究する場合、なによりもその地域に残された様々な資料を素材にして研究することは当然のことである。その際の資料には、考古資料、民俗資料、美術資料、文献資料など様々なものがあるが、なかでも文字でかかれた記録史料である古文書・古記録類は、多くの歴史的事実を提供してくれる貴重な文化遺産である。そして、この記録史料を保存し、国民共通の遺産として後世に伝えていくことを目的に、昭和六二年に制定された「公文書館法」に基づき、「文書館」が日本全国に設置されている。大分県では、この「文書館」の機能を、「県立先哲史料館」と「県公文書館」が有している。

「県公文書館」が取り扱う史料の範囲は明治四年（一八七一）に大分県が成立してから以降の県及び各市町村の公文書のみ

調査研究	人物資料 書籍類	各種レファレンス	人物紹介展 講演会	常設展 人物紹介展	出版 大分県先哲叢書 史料館研究紀要	人物資料(博物館)的機能
	古文書類 書籍類					企画展 収蔵史料展
閲覧	人物資料 書籍類		先哲講座 子ども先哲歴史講座	講演会		
講座			先哲講座 子ども先哲歴史講座	講演会		
展示			講演会	講演会・シンポジウム		

しいが、以下、各事業の内容を紹介しながら、生涯学習の場としての先哲史料館の活動について考えてみたい。

一 『大分県先哲叢書』の刊行

豊前・豊後といわれた「おおいた」の地は、古来より多くの優れた先人を育んできた。その先人たちの業績や人間像を明らかにすることを目的に、『大分県先哲叢書』が平成三年度から刊行されている。まず第一期九人の人物が選定され、そのうち

となっている。従って、近世以前のいわゆる「古文書」は先哲史料館の収集・保管・調査研究の対象となっており、先哲史料館は古文書館としての機能をも有していることになる。他県の「文書館」が、公文書・私文書といった文書の性格や作成時代を区別することなく収集・調査・保存の対象としているのとはやや異なる状況にある。

先哲史料館が有する機能の二つの側面のため、先哲史料館の各事業・業務も二分されることになる。各事業・業務のうち、教育普及に係る部分をその性格によってまとめると、上表のようになる。

「図書館」「博物館」などの機能や役割が一般的に広く認知されている施設名称とは異なり、「先哲史料館」というポピュラーでない名称をもつが故もあって、存在や各事業活動が広く認知されにくい本館ではある。生涯学習の概念が広く喧伝されてから久

の八人については既に叢書の出版がされている。『先哲叢書』は、一人の人物について原則として、専門家の研究活用を図る「資料集」、一般向けの「評伝」、小中学生向けの「普及版」の三種類の書籍を刊行している。この様に一人物について専門家から小中学生までを対象にした書籍を刊行しているところは全国的に見ても類がなく、大変ユニークな企画となっている。

第一期に取り上げられた人物および刊行書籍は以下のとおりである。現在一七種三二冊の書籍が刊行されている。(一)内は今後の刊行予定。

田能村竹田(南画家) 資料集全四巻・評伝・普及版

大友宗麟(戦国大名) 資料集全五巻・評伝・普及版

瀧廉太郎(音楽家) 資料集全一巻・評伝・普及版

ペトロ岐部カスイ(日本人司祭) 資料集全一巻・評伝・普及版

矢野龍溪(政治家・ジャーナリスト) 資料集全八巻・評伝・(普及版)

大蔵永常(農学者) 資料集全四巻(うち既刊二冊)・(評伝)・(普及版)

福澤諭吉(啓蒙家) 評伝・(普及版) (資料集は「福澤諭吉全集」(全二二巻)が刊行済のため刊行しない)

麻田剛立(天文学者・解剖学者) 資料集全一巻・(評伝・普及版)

久留島武彦(口演童話家) (資料集全四巻(予定)・評伝・普及版)

以後、さらに第二期事業に継続の予定であるが、刊行人物や事業内容はまだ未定である。

これらの内、学校教育の場で最も活用しやすいのは小中学生や初学者を読者対象にしている「普及版」であろう。大分県内の小中学校図書館には各冊を寄贈しており、学校教育における人物研究などに活用していただいている。また詳しくは後述するが、本館職員が「普及版」をテキストに人物をわかりやすく解説する「子ども先哲・歴史講座」を夏休み期間中に開設している。これらのほか、各小中学校では「普及版」を活用しての集団読書や夏休みの読書指導、児童生徒の自由課題研究などで

も利用できるであろう。また、先哲出身地域の公立図書館で子供たちを相手にした「おはなし会」を開催も考えられよう。

「資料集」「評伝」は県内各高等学校図書館には寄贈しており、地歴科「日本史A」の学習指導要領に示されている「地域研究」や「人物学習」で、教師資料や生徒の研究調査資料として十分に活用できる内容となっている。このほかに高等学校の読書指導なども活用されている。

『先哲叢書』各冊の利用により、専門研究者以外の一般の人々自身が先哲の研究に取り組むことは、生涯学習の視点から考えても『先哲叢書』の有効活用といえるであろう。

二 展示・講演会

大分県の歴史や風土が育んだ先哲の業績と人間像を紹介するため、先哲史料館の一階に展示室が設けられている。面積は約三五〇㎡と小規模であるが、導入ゾーン、シンボルゾーン、顕彰ゾーン、企画コーナーをもち、常設展示のほか、企画展を年に五・六回程度行っている。

博物館はその第一義的機能として「展示」をもつが、博物館と文書館両方の機能を持つ先哲史料館における「展示」の位置づけはやや異なる。本館では、「展示」は博物館的側面としての県出身先哲の紹介展示のみでなく、文書館的機能も含めた本館利用の入り口としての展示といった性格のものになっている。人物・歴史・古文書などの調査研究の動機付け、史料館施設や各事業の概略の紹介という性格をもつ展示室といえよう。言い換えれば、利用者に閲覧室を利用して古文書等の調査研究を通してより深く大分県の歴史と文化を理解してもらったり、『先哲叢書』をより積極的に活用してもらうための導入としての役割ともいえる。

以下に、本館展示の概要を紹介しよう。

一 常設展示

導入ゾーンでは、古来からの大分県域とアジア・ヨーロッパ・アメリカなどの関わりや、県内に残る代表的文化遺産を紹介している。シンボルゾーンでは、大友宗麟・三浦梅園・福澤諭吉の三人物を展示のシンボルとし等身大像を配置している。さらに顕彰ゾーンでは、「近世の先哲」として広瀬淡窓・帆足万里をはじめ一〇名、「近代の先哲」として慶應義塾の福澤門下生をとりあげ小幡篤次郎ほか一名、「日本のなかの大分県人」として学術・芸術分野で活躍した人物の中から文化勲章受章者と学士院賞受賞者を中心に野上弥生子・龍廉太郎など一〇名、以上あわせて先哲三四名の略歴を紹介し、縁の品々を展示している。

二 企画展示

①人物紹介展、講演会

『先哲叢書』各篇の評伝刊行にあわせ、人物紹介展及び講演会を実施している。これは『資料集』『評伝』などの出版された書籍からのみでなく、展示資料や講演とあわせて当該人物についての多角的理解をはかることを目的としている。

本年度は『福澤諭吉』（評伝）の刊行に合わせ、展示「福澤諭吉の書簡」および評伝の監修者・執筆者を講師に講演会「福澤諭吉の世界」を企画している。このほかに、人物関係資料の収蔵などを契機に、収蔵資料の紹介として行うこともある。平成一〇年度には久留島武彦の行動日誌などの収蔵を契機として「久留島武彦史料」を実施している。

②収蔵史料展

本館収蔵の史料の中から、前年度に新たに収蔵した史料を紹介する「新収蔵史料展」や、一つの文書群を通して文書が伝来した地域や家の歴史の紹介等を行う展示等を企画している。この展示は文書館的機能による記録史料中心の展示であり、主として企画コーナーを活用している。本年度は「池見家文書」とおして臼杵藩におけるキリシタン政策を

紹介する「臼杵藩キリシタン史の一コマ」、および「津久井家文書」から幕末期における府内藩の政治状況認識や対応を紹介する展示を企画している。この展示を通じ、記録史料が我々に伝える地域の歴史のみでなく、記録史料の保存の重要性なども見学者に伝えることが目的である。

③秋季企画展、講演会

大分県の歴史と文化について、本館の収蔵史料のみではなく県内外の他機関や個人の収蔵品を借用・展示することも視野に入れた幅広い企画による展示を行っている。本年度までに五回を数えるが、「宗麟からの手紙」（平成七年度）、「西嶋の日々―私塾に於ける学問・教育―」（平成八年度）、「蹴鞠―豊後の人々の球ごころ―」（平成九年度）、「古文書に見る臼杵藩稲葉氏五〇〇年」（平成一〇年度）、「府内と臼杵から戦国の世界が見える」（平成一一年度）が各テーマである。これらの展示は、古文書・古記録類を中心とした展示で、本館のもつ文書館的機能を生かした展示構成となっている。

また、平成九年度以降は展示期間中に展示テーマに即した講演会やシンポジウムもおこなっており、展示テーマの多視的な掘下げによって展示内容の理解を深めることを図っている。

以上、本館の展示について概説してきたが、人物資料（博物）館的な展示と文書館的な展示との二つの柱で本館の展示が成り立っている様子が伺えたものと思う。常設展および人物紹介展は博物館的な展示であり、企画コーナーを中心とした収蔵史料展や企画展は「古文書」をとおして大分県の歴史と文化を紹介する文書館的展示である。

文書館的機能による収蔵史料展・企画展は、博物館のように「モノ」ではなく、古文書・古記録を中心とする「記録史料」をとおして歴史を分かりやすく紹介し、利用者の学習の一助になることを目的としている。しかしながら、古文書類はくずし字がまず読めないとか、比較的地味な展示であってビジュアルでなく視覚に訴えるものが少ないなどの理由で、いわゆる歴史

ファン以外にはなかなか興味関心を持って見学しにくいのが実情であるようだ。

三 講座

① 先哲講座

この講座は、大分県の出身の先哲に対する知識の普及を目的に始まった講座で、平成九年度からの開講である。『先哲叢書』で刊行対象となった人物だけでなく、知名度は高いとはいえないが人々に知って欲しい人物なども取り上げ、年間六回の講座を行っている。これまでのべ一四名の人物を取り上げた。本年度の講座は以下のようになっている。

第一回 麻田剛立 近世の天文学者・医学者 第二回 大友頼泰 豊後に下向した大友氏

第三回 大蔵永常 近世の農学者 第四回 藤田茂吉 明治初期のジャーナリスト

第五回 久留島武彦 口演童話家・童話作家 第六回 帆足万里 近世〜明治初期の歴史家

現在は併設施設の県立図書館研修室を会場としているが、今後は県内各地での開催も視野に入れ、講座だけでなく関連史跡の見学なども考えている。来年度は、佐伯出身の矢野龍溪について実施予定である。

② 子ども先哲・歴史講座

本講座は、先哲叢書の「普及版」をテキストに、郷土の生んだ先人について子どもたちにわかりやすく解説する講座である。平成一一年度から新しく開設した講座で、小中学校の学校教育の場での児童・生徒と先哲史料館のつながりではなく、直接的に子どもたちと関わりながら大分県の風土が育んだ人物や郷土の歴史についての知識を深めてもらうことを目的としている。

一一年度は、瀧廉太郎について小学校高学年から中学生までの児童・生徒およびその保護者を対象に、夏休み中の一日

に講座を開催した。瀧廉太郎は周知のように「荒城の月」「花」等の作品を残した音楽家であり、彼の残した音楽をこの講座で聴くことによって子供たちは廉太郎についての印象を深めたようである。

③ 史料講座

本館のもつ文書館的機能の理解を図り、史料保存の緊急性・重要性を県民に広めるため史料講座を開催している。現在は、初心者への基礎編を八月に、基礎編修了者を対象に応用編を三月に、それぞれ二日間の日程で行っている。

この講座は単なる古文書解説講座ではなく、基礎編では史料論をふまえ、文書の様式・機能等も扱い、文書を通しての歴史の見方を解説している。応用編は、文書解説および目録整理法など、地域の文化財保護委員や歴史系資料館職員にとっては実践的な内容の講座でもある。本年度の講座内容の概略を紹介する。

基礎編 史料論及び古代史料／中世史料／近世史料／特殊史料

応用編 中世史料演習／近世史料演習／近代史料演習／記録史料総合演習

これらの各講座は受講者が例年多く、なかでも生涯学習の中での学びの場として中高年の方の受講が多い。各講座は県内小・中・高等学校への案内もしており、毎年学校現場の教員を中心に教育関係者からも受講者がある。ほぼ毎年参加される熱心な方もいる。しかしながら、我々の講座が学校教育の場で実際の程度授業等を通じて生徒に還元されているのかがつかめないという不安はある。

四 閲覧・調査研究

① 閲覧

閲覧室を持ち、書籍や文書類の閲覧に応じているのは、本館の文書館的機能による業務である。「展示」を中心とする博物館と異なり、この「閲覧」業務こそが文書館の中心的な役割の一つといえるであろう。しかしながら、一般の人々にとって閲覧室はなかなか足を踏み入れにくいのが実状のようである。

文書館の閲覧室は多くの図書館のように、漫然と訪れても構わない性格のものではなく、何か具体的な調査研究の目的を持って訪れる性格のものである。大多数の資料は収蔵庫に閉架されており、閲覧室には辞書類などの参考図書や目録類のみが配置されていることが多く、利用者各自の目的に添って希望資料を請求する手続きが必要となってくる。

古文書類については史料保存を目的として複製化・代替化が積極的に図られており、本館も閲覧請求の際には原則としてマイクロフィルムや紙焼きによる複製本での閲覧に依っている。必要な場合には原本での閲覧にも依っている。

古文書の閲覧はやはり歴史研究者や学生の論文作成を目的としたものが多く、一般の方々の閲覧は多くはない。これは各文書館共通の傾向であろうが、現在に残された「記録史料」を地域共通の財産として活用していく上で考えなければならぬ問題であろう。

② レファレンス

大分県の先哲や歴史の調査研究を機能の一つとしてしていることにより、多くの問い合わせが寄せられる。それは「大分」と書いてどうして「おおい」と読むのかといったものから「古文書の所在を知りたい」「県出身人物の略歴を知りたい」といったようなもので、実に様々である。なかでも多く寄せられるのは、本館の文書館的性格を反映してか「古文書を解説・解説して欲しい」というものである。

この様な依頼の場合、本館では最初から全ての解説を引き受けるのではなく、依頼者自身がまず少しでも読んでみようと試みたかを尋ね、解説を試みたが判読が不明な箇所についての問い合わせに依るといふ対応をしている。これは、あ

くまでも本館は学習の場を提供しているのであり、依頼者の「古文書を読みたい、読めるようになりたい」という学習意欲に応えることを前提にしているからである。

おわりに

先述したように「先哲史料館」は、その館名がユニークな名称であるが故の認知度の低さ、多くの利用者が訪れる「県立図書館」との併設施設であっても閲覧室、展示室ともに目立たない場所に配置されている建築構造上の問題などもあってか、なかなか存在を認知されにくい施設である。しかしながら地域の人々にとってもっと本館が身近な存在であってほしいと願うのは職員に共通の思いである。

本館の教育普及事業と学校教育現場との関係を考えてみると、『先哲叢書』を中心にした人物資料館の機能は「人物学習」などで比較的活用されやすいと思える。しかしながら図書館の機能を学校教育現場に結びつけるのは容易ではない。

世界各国の中で日本は図書館の整備が遅れている国だといわれる。地域の財産である「記録史料」を後世に継承するためには文書館整備を進め活用できる人々を育成する必要がある。そのためには、学校教育の場で文書館について学ぶことは大変意義のあることである。だが、その方法は多くの知恵と工夫が必要であろう。

たとえば「展示」を考えてみると、「古文書」を中心にした展示は、まず「読めない」「何が書いてあるか分からない」という最初の入り口段階での反応が予想される。そのために、本館では史料毎に「釈文」を付けたり、内容解説のキャプションを付けたりというわかりやすくするための工夫をしているが、釈文だけではなく「書き下し」や「口語訳」がほしいという声も寄せられている。児童・生徒を対象にする場合はこのような声はもっと大きくなるであろう。

博物館では、現在「体験型博物館」というものが多く試みられている。道具を実際に作ってみるなど、展示を観覧するだけ

ではない博物館のあり方である。であるならば、「体験型文書館」という考え方はできないであろうか。これは学校教育との関係のみでなく、文書館とは縁遠い一般の市民にとっても魅力的な文書館を考えていくことになる。たとえば料紙の折り方や封の仕方、宛所の配置や花押の書き方などを通して実際に「文書」を作成してみることも一つの案である。筆者が担当している史料講座基礎編で「折り封」「切り封」などの文書の封の仕方を実際に紙を配って受講生に実習してもらっているが大変好評である。こういう体験を通じて、文書館の存在意義や記録史料を後世に残していくことの意義を伝える必要を感じている。

文書館的施設は地域史料の保存のために古文書の現地調査を行っている。たとえば旧家や旧庄屋等に残された文書調査を体験してもらおうのも「文書館体験」の一つである。もちろん古文書の扱い方などの基礎知識がない人では問題外であるが、こういう古文書は多くの場合蔵の中で埃やネズミの糞などにまみれた状態で保存され、調査・整理には人手や体力を要することが多い。古文書が読めない人にも蔵から文書を運び出したり、埃を払うなどの基礎作業は可能であり、ある意味では新鮮な体験なのではないだろうか。このような体験を通じて、地域の歴史は決して活字できれいにまとめられた自治体史や資料集の中にあるのではなく、塵にまみれ虫に喰われた文書の中にこそあるのだということが実感として理解され、貴重な地域の財産である歴史資料を保存していく必要性が認識してもらえるのではなからうか。

本館は設立後やっと五年を迎えた歴史の浅い館であるが、ぜひ展示・講座・閲覧・レファレンスなどを学校教育や生涯学習の場で積極的に活用していただきたい。そのことが、大分県の歴史と文化の研究を深化させ、記録史料をはじめとする地域に残された貴重な文化遺産を後世に伝えることにつながると考えている。